

テーマ 消化器疾患 平成25年度漢方医学講座・臨床講座

# 消化器疾患の 漢方臨床

東海大学医学部専門診療学系漢方医学 准教授

新井 信

(平成25年11月10日収録)

今日は消化器疾患の漢方臨床について90分ほどのお話しをさせていただきます。私は昭和63年から東京女子医大で消化器内科医をしていましたが、平成4年に同大に東洋医学研究所が設立されたことから、その開設時スタッフとして漢方を本格的に始めました。ですから、漢方の臨床を、大学で21年ほどしています。

## 消化器診療と漢方治療

消化器は漢方治療において重要な領域です。西洋医学では、診療単位は消化器、呼吸器、循環器、内分泌、血液などさまざまな領域に分けられ、一応これらが横並びになっています。一方、漢方の臨床から見ると消化器の不調を治療することで、実際にさまざまな症候が良くなるのが少なくありません。消化器に使う漢方薬で消化器症状だけを治していたのでは、何も面白くないです。ですから、やっつけて面白いのが漢方です。今日は先生方には、消化器の漢方治療が面白いということを知っていただけたら、と思います。

## 機能性消化管障害(FGIDs)(表1)

消化器症状に関して、西洋医学では近年FGIDsという概念を用いるよう

表1 FGIDs(functional gastrointestinal disorders)

—ローマⅢ基準による分類(抜粋)—

<b>A. 機能性食道障害</b> A1. 機能性胸焼 A2. 機能性食道性胸痛 A3. 機能性嚥下困難 A4. 食道球(Globus)	<b>C. 機能性腸障害</b> C1. 過敏性腸症候群 C2. 機能性膨満 C3. 機能性便秘 C4. 機能性下痢 C5. 非特異機能性腸障害
<b>B. 機能性胃十二指腸障害</b> B1. 機能性ディスペプシア 食後不快症候群 心窩部痛症候群 B2. 暖気障害 B3. 悪心嘔吐障害 B4. 成人反芻症候群	<b>D. 機能性腹痛症候群</b> <b>E. 機能性胆嚢・Oddi括約筋障害</b> E1. 機能性胆嚢障害 E2. 機能性胆道Oddi括約筋障害 E3. 機能性膵臓Oddi括約筋障害 <b>F. 機能性直腸肛門障害</b> F1. 機能性便秘 F2. 機能性直腸肛門痛 F3. 機能性排便障害

になりました。FGIDsというのはfunctional gastrointestinal disorders、機能性消化管障害と訳しますが、以前に使っていた慢性胃炎のような病理学的分類ではなく、機能による分類が西洋医学では中心になってきたということです。機能による分類というのは、下痢や腹痛などの自覚症状による分類です。つまり、西洋医学の方がだんだんと漢方に近づいてきたということです。例えばFD(機能性ディスペプシア)の中のPDS(食後不快症候群)に対して六君子湯を病名で投与することも可能になったわけです。もう一つ消化器疾患を診るときの注意ですが、消化器領域は機能性疾患が多いだけでなく、悪性腫瘍の発生率も高い領域です。ですから、消化器領域において漢方薬と西洋薬をどうやって使い分けるか、あるいは併用するかは、とても重要な問題なのです。

## 様々な漢方処方への運用法(表2)

まず、消化器領域における漢方の捉え方をお話しします。実際の漢方薬の運用には、気鬱や瘀血などの漢方の基本概念に沿った治療、あるいは古

表2 臨床における漢方薬の運用方法

1. 漢方的な考え方に従った運用 (漢方の病態把握法に基づく広義の随証治療)
2. 古典の条文に基づいた運用(狭義の随証治療)
3. 特殊な漢方的概念による運用
4. 生薬の古典的組み合わせに基づいた運用
5. 口訣による運用
6. エビデンスに基づいた運用
7. 現代医学の診断による病名的運用
8. 生薬薬理学的な運用



図1 古典の条文に基づいた運用(狭義の随証治療)

典の条文にしたがった治療などがありますが、このような随証治療だけが運用法の全てではありません。エビデンスに基づいた運用や現代医学の診断による病名的運用なども、治療効率のよいものは利用すべきだと思います。先ほど申し上げたように、消化器領域では西洋医学の病名投与でもかなり良い治療効果が得られているわけですから、使えるものは積極的に利用していこうと考えています。しかし、どのような運用法を用いるとしても、臨床では処方根拠を明確にすることがとても重要だと思います。

#### ■大建中湯：古典の条文に基づいた運用(図1)

例えば大建中湯は『金匱要略』の条文に「上衝して皮に起り出で現れ、頭足上下に有り、痛みて触れ近くべからざるは、大建中湯之を主る(上衝皮起出